

ソーシャルワークと社会正義 信頼と尊敬を基盤とする新しい確かな実践への一宣言

1. ソーシャルワークの現在

今日、イギリス*のソーシャルワークはその方向性を見失ってしまった。これは新しい出来事ではない。ここ 30 年間以上にわたって多くの人々が、ソーシャルワークが危機の状態にあることを語ってきた。しかしながら、このマニフェストも、「ソーシャルワークの危機(crisis of social work)」がもはや容認しがたいものとなっていることを指摘することから始めることにする。われわれはソーシャルワーク内部での支配的な潮流に有効に抗するような、より望ましい方法を見つけ出し、そしてまた、それを果たしえる、信頼と尊敬を基盤とする新しい確かな実践(a new engaged practice)へいたる地図を必要としている。

社会正義の実現のために(commitment)、あるいは、非常に控えめに言えば、人々の生活に積極的な変化をもたらすために、われわれの多くはソーシャルワークという実践世界へ足を踏み入れた。そして、その多くはまだそこに踏みとどまっている。しかし、ますますその実現をするための余地(scope)は奪われている。

その代わりに、現在のわれわれの仕事は、マネジмент主義(マネーギアリズム: managearialism)サービスの断片化、財政的な制約や資源の不足、増大する官僚主義的な作業負荷、圧倒的なケアマネジмент・アプローチの横溢とそれに付随したパフォーマンスの指標化、プライベート・セクターを使用することなどによって形作られている。このような時代潮流が長い間ステイト・ソーシャルワーク(state social work)**において存在し続けてきた間に、それらは実践の最前線にいるソーシャルワーカーたちの主要な日課になり、クライアントへ提供する福祉サービスを形成しているのである。その結果としての効果は、一方では、マネージャーと現場のソーシャルワーカーたちの身分的・関係的な懸隔(distance)をますます大きくしながら、他方でソーシャルワーカーとサービス利用者との隔たりをも広げているのである。今日、多くのソーシャルワーク・マネージャーの主要な関心は、サービス利用者の福祉達成よりも福祉予算の統制であり、他方で、ワーカー＝クライアント関係は、ケア(care)というよりもコントロールと監督(supervision)によってますます特徴付けられるようになった。

もしこのソーシャルワークの基本的な方向性が変わらないとすれば、新しいソーシャルワークの学位も社会的ケア協議会(the Social Care Council)といったような新しい組織体も、現在の状況を改善するために何も貢献できないであろう。それらは根深い諸問題に対して、なんらその本質を解決するのではなく、その場しのぎの技巧を弄することに過ぎないからである。したがって、個々の地方自治体が福祉サービスのスタッフ不足の危機を改善するために、スタッフの給与を上げて彼らのインセンティブを刺激する試みは、問題を解決するものとはなっていない。

このような時代潮流に対する組織的な対応(response)がないなかでは、人々ははっきりと異なった個人

的な方法でこれに対処するであろう。あるソーシャルワーカーたちは、この専門職から去るかも知れないが、多くのワーカーにとって、これは選択肢(option)になっていない。あるソーシャルワーカーたちは彼らの職場において、例えば、ヴォランタリー・セクターや、あるいはより専門家的な計画のなかで、自分の空間を獲得する方法を見つけてきた。その空間は彼らがより洗練されたソーシャルワークを実施できる場所である。しかし、この選択肢も多くのワーカーにとっては利用できるものではない。というのもヴォランタリー・セクターにおいてでさえ、この時代潮流が、制定法上の行為主体(statutory agencies)のマネジメント主義的なパターンをますます反映しているからだ。

しかしながら、社会正義へのコミットメントと貧困や差別に挑戦するようなソーシャルワークへの必要性は、かつてないほどに大きくなっている。われわれの観点からすれば、このことが、ソーシャルワークが擁護に値するひとつの野心的な事業(project)であり続けていることを示している。他のどのような福祉国家関連の専門職以上に、ソーシャルワークは「公的な課題(public issues)」と「個人の私的な困難(private troubles)」との間に横たわる関係性を理解しようとするものであるし、その双方を扱おうとするものなのだ。権力者の多くが、われわれの社会において多くの普通の人々を閉じ込めている惨めさ(miseries)や諸困難に注意を向けることができなくなっているソーシャルワークを、打ちのめされ意気消沈させられたそれとして見ることを喜びとするのは、この理由のためなのだ。この関係性を理解することによってのみ、ソーシャルワークは闘うべきものとして存在することを意味するようになるのである。

現在の、専門職としてのソーシャルワークの地位が貶められているということは、同時にソーシャルワークのクライアントたちの地位や立場も貶められていることと不可分なのだ。ソーシャルワークのクライアントは、われわれの社会で最も傷つきやすく、貧困になりやすい人々であるし、また彼らは新労働党(New Labour)の社会福祉改革からもっとも恩恵を受けていない人々なのである。実際のところ、新労働党政権において、われわれはより多くの物質的な不平等の存在のみならず、難民、若者や貧困家庭など、ソーシャルワーカーたちが関わる集団が必要以上に悪魔視(demonisation)されるのを見てきた。今日、ソーシャルワーカーたちは人々の生活や生命の悪化を監督・管理する以外のことはほとんどなにもしていないのである。

したがって、打ちのめされ、沈黙させられたものとして、ソーシャルワーク専門職を喜んで見ようとする人々とは反対に、われわれは真に予防的で、かつ集合的アプローチ(collective approach)の価値を容認するソーシャルワークを探し求めている。それと同時に、われわれはまたよいケースワーク(good casework)が以上に言及した時代潮流の結果として被害を被ってきたことも認めよう。われわれは、異なった種類の社会政策上のアジェンダを形成することに貢献できるソーシャルワークを探し求めている。そうしたアジェンダは、一連の情緒的、社会的かつ物質的な諸問題を扱うことでクライアントたちが経験した諸闘争(struggles)と、彼らがその諸闘争に持ち込んだ強靭さ(strength)を理解することに拠って立つものである。

2. 希望の源泉

ソーシャルワークが変更させられてきたやり方について絶望する多くのソーシャルワーカーたちは、現在の状況から脱出する方途を見出すことができないでいる。ソーシャルワーク(とソーシャルワーカーたち)が政治家やタブロイドメディアから過去25年間にわたって袋叩きにあってきたとすれば、いくつかの絶望や落胆は理解できるものである。しかしながら、そのように理解してしまうと、最近現れてきた新しい希望の源泉に対してわれわれを盲目にしてしまうという危険性がある。その希望の源泉は、より公正で人間的な社会が求められるなかでの一役を担う、再活性化されたソーシャルワークの実践(reinvigorated social work practice)に向かう道筋を指し示すものになるかも知れないのだ。

その希望の源泉とは、過去20年間にわたって高まってきた利用者による諸運動(障害者運動や精神保健利用者の諸運動など)であり、それらは社会的そして個人的な諸問題へのわれわれの見方に革新(innovation)や識見(insight)をもたらしてきた。これらの運動はサービス利用者のニーズを扱うにあたっての多くの的をえた、興味深いアプローチを発達させてきた。例えば、集会的な権利擁護、(精神保健分野における)クライアントの声に耳を傾けるグループ、あるいは利用者主導のアプローチなどである。これらのモデルが専門職的なソーシャルワーク(professional social work)からではなく、サービス利用者自身から生まれた事実は、ソーシャルワークはそれらの運動とともにあり、学ぶ必要性があることを強調するものであり、またそれらの運動は、ソーシャルワークとのパートナーシップを形成し、新しい知的基盤とカリキュラムを発達させることをもたらすのである。

さらに付け加えるならば、過去数年間は資本主義と戦争に反対するダイナミックかつ国際的なグローバルレベルの抵抗運動の成長を見ることができた。1960年代と1970年代に、ソーシャルワークは「60年代の精神(spirits of sixties)」たる、ベトナム反戦運動、黒人運動や女性運動によって深く影響を受けてきた。将来の反抑圧主義的ソーシャルワーク実践(anti-oppressive social work practice)の基盤となったのはこれらの運動であった。今日、われわれは似たような社会運動の興隆を見ているのである。反資本主義および反戦運動内において、われわれは過去30年間に利用できたものよりもより多くの偉大な「希望の源泉」を持っているのである。利用者集団や非政府組織(NGO)の関わる諸運動が花開き、社会正義の問題がより大きな意味を持つ課題であるとする運動が広がっているのである。かれらはネオリベラルなグローバリゼーションの正統的教義(the orthodoxy of neo-liberal globalisation)に挑戦し、世界中の貧困である人々や持たざる者への、環境への、諸サービスの^{インパクト}の民間化(privatisation)が、人間が支払うべき代償(human costs)に与える破壊的な^{インパクト}について異議を申し立てているのである。

反資本主義運動(the anti-capitalism movement)は、1999年シアトルにおいて世界貿易機構(WTO)に反対する抵抗から生まれ、地球的規模で広がっている。それ以来、この運動は反戦や反帝国主義の運動に合流してきた。2003年2月、200万もの人々がイラク戦争に反対するためにロンドンでデモに行ったときに、反資本主義の抵抗精神は劇的にイギリスにやってきた。そのエネルギーと若さとともに、広範的かつ包括的な性格を有するこの運動は、絶望へ落ちていった多くの人々をよみがえらせた。それはまた労働組合運動内の抵抗精神をも若返らせるという影響を与えてきたのである。

しかしこれらの運動は単なる反戦や反資本主義運動ではない。それらはまたこれまでとは異なる様々

な未来を考え始めたのである。過去3年間にわたって、いくつかの世界的規模の、またはヨーロッパ規模の社会フォーラムにおいて、多くの人々が集まり、どのようなもうひとつの世界(another world)があるかについての議論をし、そのあり方をめぐる理念を分かち合った。こうした議論は、核となるような「反資本制的な」諸価値('the anti-capitalist values')、すなわち、民主主義、連帯、応責性(accountability)、参加、正義、平等、自由(liberty)および多様性といったものを基盤とする、現代のソーシャルワークのあり方について、われわれが構想することを可能にする。

したがって、われわれは自分たちが岐路に立っていることを知っている。一方では、現場のワーカーたちのフラストレーションや絶望とともに、マネジメント主義と増大する市場化主義を粉砕することに。他方で、それはこれまでとは違う、よりよき世界のために、新しい集合的運動のなかで希望の源泉とともにある、生まれ変わるソーシャルワークのための可能性があるということに。

3. ひとつの倫理的な使命を持った職業

止むことのないイギリスにおけるソーシャルワークの危機は、われわれに多くのことを教えてくれた。それはもはや誰も正常な精神であれば容認することができないという事態に至ったのである。再びかつてのような、専門職的な傲慢さをもった過去へはもはや戻ることができないことや、進歩的な変化が利用者とするすべての現場のソーシャルワーカーを巻き込まなくてはならないことをわれわれに教えてきたのである。予算に支配された福祉システムは残酷であり、人間の福利(well-being)に対して破壊的であることをわれわれに想起させてきた。その犠牲者たちは、ソーシャルワークのシステムのあらゆる場所におり、それらはクライアント、利用者、そしてソーシャルワーカー自身である。混迷の年月は、ソーシャルワークは国家のための働きによってではなく、ソーシャルワークの価値そのものによって定義されなければならないということに光を当ててきたのである。結局のところ、社会正義を可能にするソーシャルワークのヴィジョンと、そのようなことを可能とするための環境を擁護するような集合的組織への要求において堅固な教訓が存在し続けてきたのである。

このマニフェストのはじめにわれわれが述べたように、過去に多くの人々がソーシャルワークに従事した理由は、ソーシャルワークが消極的な意味で人々を抑圧したり、搾取したりするのではなく、たとえ小さな道すじであっても、そこから社会変革に通じる生計手段を提供しているようにみえたからであった。言い換えれば、ソーシャルワークはひとつの倫理的な使命を持った職業(an ethical career)であった。しかしながら、社会変革へのポテンシャルは、過去 15 年間を特徴づける福祉の市場化とマネジメント主義への攻勢(drives)によって、ソーシャルワークからほとんどすべて搾り取られてしまった。とはいえ、そうは言っても、ソーシャルワークに従事する圧倒的に多くの人々は、自分たちが単なるケアマネジャーになるうとか、サービスの配給者になるうとか、あるいはコミュニティの懲罰(community punishments)を自動販売機のように^{ディスペンサー}施与する者になるためではなく、むしろ貧困者や抑圧された人々の生活・生命に対してより積極的な寄与をなそうとしてこの職業に就き、そこに踏みとどまり続けるものなのだ。したがって、そのような志を持ってソーシャルワークに従事するということは、現実と直面したときに、理想とのギャップが生まれることを不可避とするが、同時に、あるべき本来のソーシャルワークが何たるものであ

るかを知ることになるのである。

われわれはあらゆる組織がその「倫理的な使命をもった職業サービス」(‘Ethical Careers Service’)内でソーシャルワークを含んでいることを特に心に留めておく。もしもその進歩的な理想がたとえ部分的であっても実現されるならば、われわれは、それならば、何が正真正銘の反抑圧主義的ソーシャルワークであるかの共有されたヴィジョンの周辺に位置する諸組織や集団との間に、連帯に向けた合流や組織化をする必要があるのである。

このマニフェストは、そのようなヴィジョンと組織を発展させる過程に向けての小さな貢献である***。

クリス・ジョーンズ リヴァプール大学ソーシャルワーク専攻教授

イアン・ファーグソン スターリング大学ソーシャルワーク専攻講師

マイケル・ラヴァレット リヴァプール大学社会政策専攻上級講師

ラウラ・ペンケス マンチェスター大学ソーシャルワーク専攻講師

(翻訳)伊藤文人 日本福祉大学

(訳注)

* イギリス

原文は、Britain であるが、翻訳の関係上、該当箇所は、すべてイギリスで統一した。

** ステイト・ソーシャルワーク(state social work)

一般的に、左派系の研究者がソーシャルワーク実践やそれを取り巻く制度的環境を指して表現する用語であり、公務員体制を軸とした国家部門のソーシャルワークのこと。ニュアンスとしては、シーボーム改革以降、地方自治体における社会福祉部において、専門的ソーシャルワークが、ジェネリシズムを基盤としながら整備されていった経緯があった。ここにいたって、ソーシャルワーカーの地位も福祉官僚専門職(welfare profession)として安定的になったことから、このような呼称がなされるようになったようである。ただし、こうした背景が、サッチャー改革以降にもはや通じなくなったことだけは明白であり、マニフェスト執筆者たちはこうした変化を検討しているのである。

*** ただし、このマニフェストに登場する各種団体名の正式名称が翻訳に適さないことや、その関係で文脈上日本語に訳すことが不必要な部分があったため、細かい諸団体の実践内容はここでは記されてはいない。訳者の判断で割愛した箇所がいくつかあることを予め断っておきたい。

